

ひとりの家

鈴木捷万

「おかえり」がない家に

「ただいま」と言ってみる

玄関の扉を閉める音が

妙に大きく響く

帰る場所はどこなのに

帰りを待つ人はどこにもいない

「いってらっしゃい」と見送る人もいないのに

なぜか「いってきます」と

小さな声でつぶやく朝

その声は虚空に消え

誰にも届かないまま

ひとりで過ごす時間は

ゆっくりと、しかし確実に

胸の奥の静寂を広げる

遠くで遊んでいる子供の声

時間を刻む時計の針の音

どれも私の孤独を埋めてはくれない

かつては賑やかだった食卓

笑い声と湯気の立ち上る景色

それが普通だったはずなのに

今では静けさがそのすべてを覆い尽くす